横浜開港資料館館報　YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS　第75号

開港のひろば

Number 75

編集・発行／横浜開港資料館
〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地 電話(045)201-2100
ホームページ http://www.kaikou.city.yokohama.jp/

発行日／平成14年1月30日（水）
印　刷／中川印刷株式会社

2代目橘樹郡役所（添田有道氏蔵）

企画展
橘樹郡役所ものがたり
―都市近郊農村の半世紀―
1878～1938

明治・大正の頃、現在の横浜市鶴見区、神奈川区・保土ヶ谷区・港北区の各一部、および川崎市のほぼ全域にあたる地域は、橘樹（たちばな）郡と呼ばれていました。この地域を管轄する橘樹郡役所は、明治十一（一八七八）年、神奈川町（現神奈川区）成仏寺に置かれました。

その後郡役所は、明治二十一年、神奈川町八一三番地（現在の神奈川区地区センター付近）に新築移転されます。当時の神奈川町は人口一万四千人を数え、横浜市との交通の結節点でもあったため、橘樹郡の政治・経済の中心地でした。上の写真は橘樹郡役所前に集合した、三浦助一郎郡長（前列中央）、及び明治四十二～四十四年頃の橘樹郡会議員の面々です。神奈川町は明治三十四年に横浜市に編入されたため、既に橘樹郡ではありませんでしたが、郡役所の建物はそのまま置かれていました。

明治後期以降、郡南部の工業化・都市化の進行により、橘樹郡の中心地は川崎町へと移動します。右の写真は、大正二（一九一三）年に神奈川町から川崎町砂子（現川崎区）に新築移転した橘樹郡役所の写真です。大正後期の川崎町の様子を記録した土屋寛蔵氏は、「厳然とした門扉があり、玉砂利を敷きつめたその奥に二階建の郡役所が聳え立っている」と書き留めています（竹内清氏蔵、土屋寛蔵氏原稿より）。

大正十三年には川崎市が誕生し、橘樹郡役所は、同十五年には廃止されます。郡役所廃止後も橘樹郡の地名は存続していましたが、昭和期以降の横浜市・川崎市の度重なる市域拡張によって次第にその領域を縮小させ、昭和十三（一九三八）年には地図上からも消滅してしまいます。

本展示では、橘樹郡の中枢であった橘樹郡役所およびその関係者の活動を中心に、橘樹郡の約半世紀の歩みを、地域に残された資料でたどります。

（松本洋幸）

3代目橘樹郡役所（『郡制有終記念帖』より）

企展画

明治末・大正初期の橘樹郡

第八代郡長 三浦助一郎と第十代郡長 市村慶三

明治十一（一八七八）年に公布された郡区町村編制法を受けて、神奈川県は横浜区と、橘樹・久良岐・鎌倉・三浦・都筑・高座・愛甲・淘綾・大住・北足柄・南足柄・津久井・北多摩・南多摩・西多摩の十五郡に区分された。各郡には郡役所が設置され、県令によって郡長が任命された。以後大正十五（一九二六）年に全廃されるまで、郡役所は神奈川県と町村との中間にあって、郡内の行政事務と、管下町村の監督にあたっていた。郡長の任務は、徴税・徴兵・教育・諸願届の処理とともに、管下の町村行政の監督など、極めて多岐に亘っていた。

歴代の橘樹郡長を一覧化したのが左表である。松尾豊材、安達安民ら、初期の郡長の在任期間が長期にわたっていることが分かる。また橘樹郡長の多くは赴任以前に神奈川県内の他郡で郡長を経験した者が多く、大正期以降、他県へ栄転するケースが増えてくる、という特徴が窺える。これらの点についての検証は今後の課題であるが、今回の展示準備の過程で若干のデータを得ることのできた、第八代郡長・三浦助一郎と第十代郡長・市村慶三の時代を中心に、明治末期から大正初期にかけての橘樹郡政の展開を垣間見ることにしたい。

代	郡長名	前職	橘樹郡長在任期間	後職
1	松尾豊材	神奈川県五等属	明11.11.18～明21.10.1	足柄上郡長
2	増田知	横浜区長(兼任)	明21.10.1～明22.6.19	横浜市長
3	中山信明	鎌倉郡長	明22.6.19～明24.11.28	足柄下郡長
4	安達安民	南多摩郡長	明24.11.28～明31.5.11	(依願免本官)
5	白根鼎三	鎌倉郡長	明31.5.11～明33.12.26	中郡長
6	松尾豊材	愛甲郡長	明33.12.26～明40.4.15	(依願免本官)
7	樋口忠五郎	足柄下郡長	明40.4.15～明42.4.30	(依願免本官)
8	三浦助一郎	神奈川県属	明42.4.25～明44.8.31	神奈川県事務官補
9	国松英太郎	愛甲郡長	明44.8.31～明45.5.31	(依願免本官)
10	市村慶三	北海道庁警視	明45.5.31～大正5.1.10	千葉県理事官
11	羽田格三郎	久良岐郡長	大正5.1.10～大正6.8.25	東京府理事官
12	隈元清世	都筑郡長	大正6.9.10～大正10.7.3	香川県内務部長
13	川島一郎	都筑郡長	大正10.7.13～大正11.5.5	北海道庁理事
14	武田巌作	三浦郡長	大正11.6.9～大正12.3.6	(死亡)
15	伊東匡義	三浦郡長	大正12.3.20～大正14.8.7	(死亡)
16	福本柳一	横浜地方裁判所司法官試補	大正14.10.1～大正15.6.30	神奈川県事務官

『神奈川県公報』『郡制有終記念帖』『川崎市史 通史編3』などをもとに作成

第八代郡長・三浦助一郎

三浦助一郎は安政五（一八五八）年、彦根藩士で漢学者の家に生まれた。助一郎の息子には、柳田邦男の小説『マリコ』にも登場する三浦義秋（中華民国総領事などを経て外務次官）がいる。

三浦が橘樹郡長を勤めた時代は、全国的に内務省主導の地方改良運動が展開されており、橘樹郡にも明治四十四年六月地方改良会支部が発会している。三浦は町村自治の改善を期すべく、役場事務の改善、就学の督励、農事の改良などを進めようとした。

彼が最も力を注いだのは教育の振興であった。橘樹郡には、教育の普及振興を目的として郡内教員を中心に組織された橘樹郡教育会があったが、三浦は教育会へ財政援助を行う一方、教員講習会、通俗講演会、県内外への視察員派遣などを実施した。

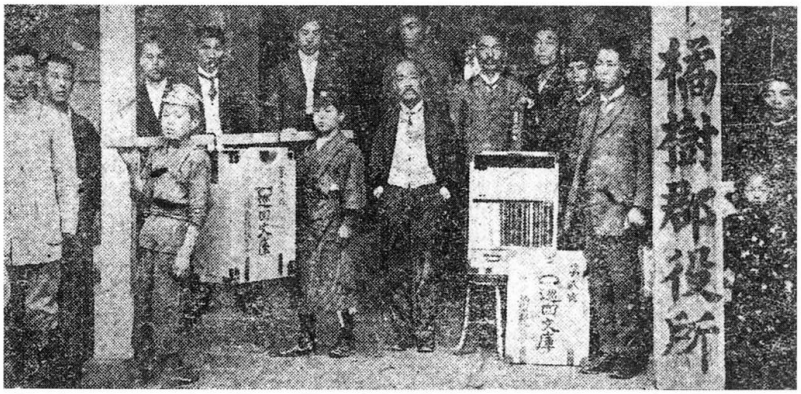
さらに彼は、県内他郡に先駆けて、巡回文庫を設立している。これは現在の移動図書館ともいうべきもので、郡で数個の文庫箱を準備して、順次郡内町村を巡回して行くというものである。その趣旨に曰く。

今や時運の趨勢上個人的教育は勿論、社会的教育に尤も力を用ふべき必要を促し来り候処、之か施設の方法たる素より一にして足らすと雖、先つ巡回文庫を創設して時代に応する社会の知識及品性を修養せしむるは最大急務と思考致候（「飯田家文書」近代・冊・団体16　飯田助知氏所蔵、神奈川県立公文書館保管）

しかし実施には財政上の困難があり、三浦は郡内の教育者・町村吏員・有力者らに寄付金と書籍の寄附をよびかけ、合計三百円の醵出があったという（『横浜貿易新報』明治四十三年六月二十三日）。橘樹郡巡回文庫は、明治四十三年六月二十五日に、第一文庫が保土ヶ谷町、第二文庫が稲田村へ発送され、以後各町村の小学校に半月間備え付けられ、順次郡内の各町村を巡回して行った。右下の写真はその発送当日の風景である。中央は三浦、その左側の二人の少年が担いでいる箱が第一文庫、三浦の右側に置かれている箱が第二文庫である。郡内十九町村を巡回した成績は、第一号のみで総計一万人を超える利用者があった（『横浜貿易新報』明治四十四年五月三日）。

この巡回文庫創立とほぼ同時期に開催された第三回地方改良講習会に出席した三浦が書き留めた講義ノートがある。六月二十八日に開講された「自治訓練の方法」（講師・井上友一内務次官）の講義録には、巡回文庫のことが次のように登場する。

注意すへきは巡回文庫等の書類の選択に尤も慎まさるへからす、鄙猥なる少説、又は自然主義、又は社会主義に属する雑誌に禁（ママ）



『横浜貿易新報』明治43年6月29日

大正４年の橘樹郡役所職員
（市村眞三氏蔵）

すへし（「原家文書」川崎市市民ミュージアム蔵）

文庫の書籍選択には三浦も注意を払い、郡内の青年子弟が興味を抱きやすい通俗的なものを選び、教育図画ポンチなども購入したという（『横浜貿易新報』明治四十三年六月二十三日）。二個の文庫箱で出発した巡回文庫は、大正四年には、文庫箱二十、通俗図書六千冊を数えた（『橘樹郡施設事業の概要』）。

第十代郡長・市村慶三

歴代橘樹郡長の中でも第十代・市村慶三の履歴は燦然と輝くものがある。明治四十三年東京帝国大学法科を卒業後、同年高等文官試験に合格、北海道庁警視を振り出しに、橘樹郡長、千葉・兵庫・奈良各県理事官、皇宮警察長、神奈川県内務部長、福井・愛媛・三重・鹿児島各県知事等を歴任、最後には京都市助役を経て京都市長をつとめる。二十八歳の若さで橘樹郡長に就任した彼の秀逸さと郡政への貢献度は、『横浜貿易新報』も「克く郡務に精励し、郡務の改良を初め、郡民を指導し、教育の改善、農業の奨励、防水の用意、灌漑水利の利便、耕地の整理等に尽瘁し、其処決果断に富み…其壮年有為の頴才には郡民大に喜服し居れり」（大正二年十二月六日）と評すほどであった。彼の残した数多くの功績のうちのいくつかを紹介しておこう。

まず、大正三年に設置した「郡道」である。これは、それまで町村で舗装していた里道のうち重要なものについて、郡から一定額の補助を与えるという制度で、東京・横浜の大都市に挟撃される地域にあって、工業地帯・都市近郊農村として流通機能の充実を図ることを目的としたものであった。市村は三年間で十八本、総延長四九七三二間、総工費二三二一〇円（大正三年郡予算の約一・七倍）の整備計画を立案し、郡会で承認され、翌年から郡費の大半を費やして郡内交通網の整備が行われた。

こうした土木事業を推進しようとする市村への期待は、彼を当時橘樹郡が抱える最大の問題であった「多摩川築堤運動」の主導者へ押し上げることとなった。明治後期から毎年のように繰り返される多摩川の氾濫に業を煮やした多摩川右岸中下流域の町村は、大正三年のアミガサ事件の直後、多摩川築堤期成同盟会を組織し、市村はその会長に就いた。この運動の推進者の一人であった日吉村（現川崎市中原区）の成川宗義と市村との間で交わされた数通の書簡から、市村が築堤をめぐって、先頭にたって県庁へ働きかけたり、郡内の意見のとりまとめに苦慮している様子が窺える（野口貞之氏の御教示による）。

多摩川築堤運動は郡下町村を巻き込み、全郡的なネットワークを形成するのに影響を及ぼしたと思われるが、このほかにも市村は、郡政に関わる公報出版物を多数刊行することで、「郡民」に対して郡政を周知せしめる方策をとった。市村郡長時代に出された橘樹郡関係の行政刊行物としては、郡統計一覧、橘樹郡案内記、郡公報、橘樹郡施設事業の概要、などがある。

このほか市村は郡役所書記の人材育成にも力を入れている。上の写真で前列中央の市村の右に座るのは若き日の横山三佐二である。彼はこの後郡役所書記として勤続した後、川崎市助役、神奈川県会議員などをつとめる。横山は長い間市村の薫陶を受けていたようで、昭和十九（一九四四）年市村の妻の葬儀に際しては見舞い状を送り、次のように述べている。

大正二年春御厄介になってからまあ永い永い御高恩を受けました。鶴見の御宅〔鶴見に市村の邸宅があった〕へヒロ子や赤子をつれて参ったことや、千葉へ御邪魔し、神戸では御嬢様と御一所に六甲山へ行った思出、皇宮警察署長官舎にしばしば伺ったり、神奈川県の御在官当時の事、津の官舎へ朝早く参上した事など、一々走馬燈の様にハッキリ思ひ出され、温容が目先に見えます（市村眞三氏蔵）

郡長時代はもちろんのこと、市村の栄転先へも足をたびたび運び、家族ぐるみでの親交が持続していたことを彷彿とさせる。また市村の左側は遊佐吉則。彼も大正十三年に久良岐郡長となった後、市村と赴任地をともにすることが多かった。

以上、今回関係資料・情報を若干得ることができた二人の郡長を紹介したが、このほかにも、自ら橘樹郡親睦会を組織するなど、自由民権運動の先鋒となった初代・第六代郡長松尾豊材や、第一次世界大戦後の急激な都市化に対応すべく郡内諸産業の保護育成につとめた隈元清世などの資料を企画展示で紹介している。

市村退任後も、橘樹郡役所職員の中でその後横浜・川崎の重要な役職をつとめた人々は多い。徳植信之助（横浜市農政課）、岩野一男（保土ヶ谷区役所）、島田俊三郎（川崎市助役）など、橘樹郡役所は、後の市政を支える官僚たちが、若き日に修練を積んだ場所でもあったことをここに付記しておく。

これまで郡についての分析は、郡役所関係資料が極めて少ないことから、充分になされてこなかったが、今回の企画展示が、そうした従来の研究史の空白部分を幾分かでも埋めることができ、またこれまで何人かの先人が試みながら書かれることのなかった、「橘樹郡史」への第一歩となれば幸甚である。（松本洋幸）

幕末・明治初年の貿易品をめぐって

前回の企画展示「開港場横浜と東海道」では、幕末から明治初年にかけて、交通や運輸が大いに活性化したことを紹介した。また、展示では、その理由をいくつか示したが、その内のひとつに物資の流通量の急増があった。

特に、大量の貿易品が横浜を舞台に集散するようになったことが、交通や運輸を盛んにさせたようである。そこで、ここでは展示では紹介しきれなかった貿易品の集散の様子について紹介してみたい。

横浜港の主要貿易品というと、生糸や茶を思い浮かべる人が多い。しかし、この地で集散された貿易品は生糸や茶だけではなかった。むしろ、交通や運輸の活性化は、生糸や茶よりも重い貿易品によってもたらされた。

たとえば、開港直後に日本から大量に輸出された品物に水油と雑穀があるが、この二つの物資は当時の貿易品の中で重量からみれば最も大量に輸出された品物であった。この内、水油は照明用の植物油であり、中国大陸向けの商品であった。

また、雑穀は麦や大豆であり、当時、中国大陸で勃発したアロー戦争でイギリス軍やフランス軍が使役した軍馬の飼料として輸出された。どちらの品物（水油・雑穀）も一年間に約四五〇〇トンが輸出された。

こうした重たい物資を集荷するためには、多くの馬や船が必要であり、生産地と横浜を結ぶ新たな運輸ルートが作られていった。また、そうした運輸ルートに沿った地域では交通や運輸が大いに活性化した。

もっとも、水油と雑穀の輸出は幕末の一時期に限られたため、交通や運輸への影響も一時的なものであったが、明治時代になると貿易品の種類も増加し、さまざまな貿易品が交通や運輸のあり方に影響を与えるようになった。

たとえば、明治時代になって大量に取引されるようになった商品に米があった。この商品は、中国大陸との間で取引され、明治九（一八七六）年には一万六〇〇〇トン以上の米が横浜から輸出された。

大量輸出の原因は中国大陸での飢饉の発生であり、日本の米は中国の人々を救うことになった。また、逆に中国大陸や東南アジアから米が輸入されることもあり、明治一三（一八八〇）年には九〇〇〇トン以上の米が輸入された。

この時、日本では諸物価の高騰が社会問題になっており、各地から輸入された米は米価の高騰を抑える役割を果たすことになった。いずれにしても、莫大な量の米が移出入されたことは、横浜を起点や終点とする運輸のあり方に大きな影響を与えたと考えられる。

さらに、貿易品の中には、江戸時代以来の物資の流通ルートを大きく変えた商品もあった。たとえば、横浜では明治初年以降、中国大陸や台湾から大量の砂糖が輸入された。輸入量は年によって変動があるものの、日本に輸入される砂糖の七〇パーセントから八〇パーセントが横浜を窓口にして国内に移入された。

また、移入された砂糖は、東京を経由して全国に送られることになったが、こうした砂糖の流通経路の出現は、江戸時代の国産砂糖の主な集散地であった大阪の流通上の位置を低下させた。

特にイギリスの商社が香港に設立した精糖工場が良質の砂糖を横浜へ出荷するようになると、国産砂糖は価格の面で対抗できなくなり、大阪の砂糖問屋は大いに困却したと伝えられる。

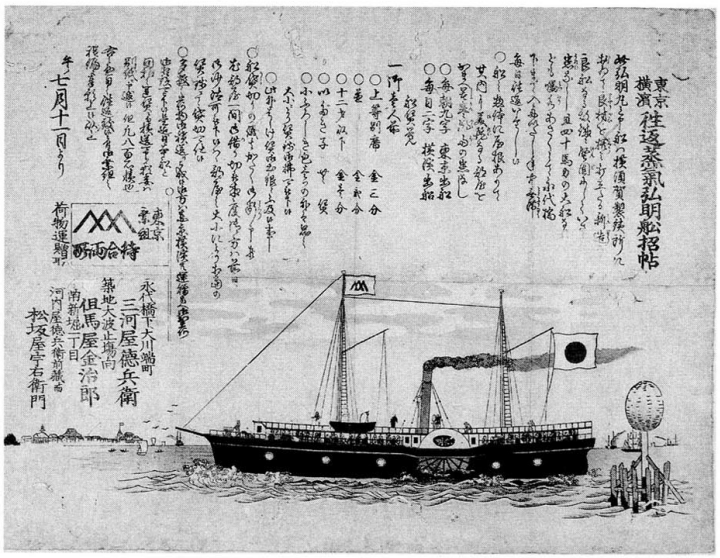
このように、横浜では多種多様な貿易品が取引されたが、残念ながら統計資料が揃わないため、横浜で輸出入した貿易品の総重量を示すことはできない。しかし、重量が判明する貿易品だけを集計するだけでも、その量は莫大なものになる。

ちなみに、明治九（一八七六）年を例にとれば、重量が判明する輸出品の総重量は二万八九一一トン、同じく輸入品の総重量は五万一七二一トンに達している。これらの物資が日々さまざまな運輸手段を利用して運ばれていたことになる。

さらに、これに加えて横浜の住民や各地から横浜を訪れた人々が日常的に消費する物資、都市化の進展にともない消費される建設資材などが大量に運び込まれ、横浜は交通・運輸の一大拠点へと発展していった。

また、それにともない交通・運輸の手段も近代化され、横浜を舞台にして蒸気船・汽車などの近代的な交通・運輸手段が実用化されていった。

（西川武臣）



京浜間航路に就航していた弘明丸の広告　この船は明治3（1870）年に運航を開始し、旅客だけでなく、多くの荷物を運んだ。

資料
よもやま話1

横浜史談会と渡辺和太郎

明治四二（一九〇九）年七月一日、横浜市は開港五十年を迎え、盛大に祝賀行事が繰り広げられた。開港から五十年を経て、郷土の歴史を見直そうという機運も高まり、横浜の歴史を顧みる企画も催された。たとえば横浜商業会議所主催の開港紀念史料展覧会であり、『開港五十年紀念横浜成功名誉鑑』（明治四三年、横浜商況新報社）の刊行などであった。

そうしたなかで、趣味団体が集会を催したり、個人で収集した郷土史料を展示する展覧会が開催されるようになる。明治四一（一九〇八）年十二月には横浜古銭会の第一回例会が開催され、明治四三年十月には渡辺和太郎ら十数名が組織した埃及（エジプト）研究会が、第一回研究会を開催した。大正二（一九一三）年七月には、加山道之助（号可山）らが第一回横浜納札交換会を開催した。そしてこの頃、横浜史談会や成趣会といった団体も組織された。

横浜史談会の成立

横浜史談会会規によれば、横浜史談会は「横浜及び其附近に関する郷土史料の研究及び其蒐集を」目的とし設立された。仮事務所を代表であった万朝報横浜支局長曽我部俊治（一紅）の私邸（横浜市住吉町六丁目）に設けた。活動は「毎月第三土曜日を以て小集会を開き、七月開港紀念日を以て大会を開く、大会には付属事業として史料展覧会若くは史蹟講演会を開く」というものであった。そして横浜史談会は、大正四（一九一五）年七月一日から三日まで、第一回横浜史料展覧会を横浜公園内の運動クラブで開催した。展覧会後の九月からは、史談会が収集した横浜史料に関する図書を、仮事務所において、横浜文庫と称し土曜・日曜に限り一般に公開することとした。民間の団体が、収集した資料を展示し、かつ閲覧公開するという、当時としては画期的な事業であった。

翌大正五年七月には第二回横浜史料展覧会を、大正六年七月には、第三回横浜史料展覧会を開催した。展覧会は盛会で、第三回展覧会の一般公開初日には、一日で五千人もの人が訪れたという。

第一回横浜史料展覧会で出陳された資料の目録が、「横浜史談会主催横浜史料展覧会出品目録」である。出展された史料点数は三八四点、史料提供者は、史談会・横浜文庫のほかに、渡辺和太郎・原田久太郎（棲雲）・設楽巳知（丹葉）・軽部亀松（漱芳）ら二三名を数えた。

横浜史談会と渡辺和太郎

ここでは、第一回横浜史料展覧会目録の資料提供者名の筆頭にある渡辺和太郎について述べてみたい。

渡辺和太郎（太良）は、明治一一（一八七八）年六月四日、海産物商石炭屋として財をなし、後に渡辺銀行・渡辺合名会社等を興し、横浜の一大富豪となった渡辺福三郎（一八五五～一九三四）の長男として横浜に生まれた。明治三一（一八九八）年に横浜商業学校（Y校）を卒業し、横浜正金銀行に勤めたのち、卒業の翌年から三年間、欧米視察に出かけた。滞在したロンドンで、夏目漱石と知り合い、その親交は生涯絶えなかったという。帰国後は父福三郎の仕事を助け、実業家として活躍した。『大正人名辞典』（第四版、東洋新報社、大正七年刊）によれば、当時和太郎は、渡辺合名会社代表社員、（株）渡辺銀行取締役兼支配人、横浜電気工業株式会社・横浜化学工業株式会社・南太平洋貿易株式会社各取締役、東海鉛管株式会社・サトウライト株式会社各監査役の要職にあった。

和太郎と共にY校を卒業し、欧米でも多くの時間を共に過ごした実業家渡辺伝右衛門（春渓）は、和太郎が、漱石等と句会や演劇・絵画鑑賞を楽しんでいた様子を書き残している（「漱石先生のロンドン生活」（『漱石全集』別巻）。また『渡辺和太郎君小伝』（『Y校五十周年記念誌』、以下「小伝」）には「君亦よく史書を蒐集し、横浜沿革に関する資料、維新志士の遺墨等多くの貴重文書を蔵せり」とあり、和太郎が、幅広い文化的教養をもつ人物であったことが伺える。

私的な団体である横浜史談会が、史料展覧会の開催・横浜文庫の開設という事業を行った背景には、和太郎が数年にわたり過ごした外国での経験が生かされたのかもしれない。

また三年にもわたり、毎年大規模な展覧会を趣味団体である横浜史談会が開催するには、膨大な資金が必要である。横浜史談会の仮事務所が置かれていた曽我部宅の地所が、渡辺和太郎の所蔵であったことを考えると、豪商和太郎が、横浜史談会に対し、資金援助をおこなっていたとも考えられる。

しかし残念なことに和太郎は病弱であったらしい。漱石も、数度にわたり、病気見合いの書簡を送っているが、「小伝」によれば腎臓を患っていたらしく、大正一一（一九二二）年八月二十一日、和太郎は四十四歳の若さで亡くなった。

横浜史談会の終焉

そして和太郎の死の翌年、横浜は、関東大震災により壊滅的な被害を被った。横浜市は『横浜市史』編集のため、史料の収集を行っていたが、市役所内にあった膨大な史料を焼失した。横浜市史編纂所編纂主任堀田璋左右は横浜市の惨状を次のように報告している。「何れにせよ横浜に関する根本史料は根コソギに焼失致し候。（中略）終に編纂は中止と相成り申し候。曽我部一紅君は史料蒐集には多大の功労者なれど、二万巻の書と共に命を殞し、（中略）渡辺和太郎君の土蔵は幸運に存せしも、本館に出しおきの儘の書籍多数なれば、皆焼けたる成る可し」（『中央史壇』第九巻第三号）。横浜史談会は震災前に、史料収集に熱意をもつ豪商和太郎を、震災で会の代表曽我部と、多くの史料を失った。そして人材と史料を失った横浜史談会が、その後活動を再開することはなかった。

（石崎康子）

1945年12月1日、ドン・ブラウン厚木に降り立つ――ブラウンの書簡（控）から

ドン・ブラウンについて

ドン・ブラウン（ドナルド・ベックマン・ブラウンDonald Beckman Brown）は、一九〇五年オハイオ州クリーブランドに生まれた。ピッツバーグ大学に学び、三〇年頃に来日し、当時、極東で著名な英字紙、『ジャパン・アドヴァタイザー』*The Japan Advertiser*の記者となった。四〇年一〇月、同紙が日本政府によって『ジャパン・タイムズ』*The Japan Times*に吸収合併させられると、退社し、帰国した。戦時中は戦時情報局（OWI）に属し、対日宣伝ビラ作成などにたずさわった。

戦後、四五年一二月一日に再来日し、GHQの民間情報教育局（CIE）情報課のチーフとしてさまざまなメディアの「民主化」政策にかかわった。GHQ廃止後も日本に住み、八〇年、名古屋で亡くなった。

ドン・ブラウンの書簡（控）

当館は、ブラウンの没後、その図書約一万点と新聞・雑誌および文書類を譲り受けた（ドン・ブラウン・コレクション、現在整理中）。

同コレクション中に、ブラウンが再来日直後の四五年一二月三日から翌四六年四月一六日にかけてアメリカに住む友人宛てに書いた書簡全五四点のカーボンコピーの控えがのこっていた。ブラウンの当時の職務内容、同僚や日米の旧友らとの交流、占領開始直後の日本および日本人にたいする率直な批評などが詳述された内容豊富な歴史資料である。

ここで紹介するのはその第一信である。ブラウンは、四五年一二月一日に厚木基地に降り立ち、その日の内に横浜を通過して東京に着いた。東京湾上の機中から、あるいは厚木基地や東京への車中から見た占領開始間もない横浜や東京のようす、東京で目にしたGHQの初期の混乱ぶりなどが記されている。

ブラウンやそのコレクション、書簡（控）の詳細については、拙稿「ドン・ブラウンとE・H・ノーマン――ドン・ブラウン書簡（控）から」（『横浜開港資料館紀要』第一九号、二〇〇一年）を参照されたい。

一九四五年一二月三日付書簡（控）

親愛なるボブ、

事務所の庶務が混乱していなければ、それはまったくありえないわけではないが、君は何日か前にわれわれが無事到着したことを聞いたに違いない。到着の過程は完璧とはほど遠いものだったが、今は、そのことを手紙に書いて出したいという衝動がとても強い。東京の諸状況によって余儀なくされているある種の奇妙な共同生活から抜け出したいという思いと同様なほどの強さである。

ホノルルに戻るために、われわれは水曜［四五年一一月二八日］の夕方をあわただしく過ごし、ヒッカムHickam［ホノルルの米軍空軍基地］を［午後］一〇時四五分に発った。搭乗者はわれわれ三人だけで、わたしの他にはボブ［宛名人のボブとは別人］と、ポーランドからの難民で朝鮮に赴く医療大尉だけであった。その大尉の話によると、ドイツ兵はかれの近親者と、親類縁者の男たちを皆殺しにしたそうだ。乗務員はとても親しみやすかった。機長は赤毛のアイルランド人で、ブラジル南部のドイツ人植民地開拓者たちの中で改革派の宣教師として三年間過ごした後、アイダホ大学のドイツ語教師となった。義務兵役制度が始まった時は高血圧が原因で4F 4-Fer［意味不明］となり、アラスカで建設現場労働者として働いた。そして軍隊が特殊なものでなくなってから、第六空軍の爆撃パイロットになったという。コックピット内の副操縦士席に座って、さまざまな計器類の文字盤と機械装置類の複雑さに驚き、畏敬の念をいだきつつ太平洋にかかる星星に目を凝らすという体験は初めてのことだった。

一二時間でわれわれはクワジャリン島Kwajalein［マーシャル諸島］に到着した。息苦しいかまぼこ兵舎で朝食をとってから、われわれはグアムへ飛び立ったが、すぐに戻る羽目になった。というのも第三エンジンが高圧磁石発電機の故障を起こしたからだ。われわれは修理の間中、その近くで約四時間、ひどい暑さの中、座っていた。あまりの暑さに動いている誰もがばかばかしく見えた。クワジャリン島を発ってから八時間後、われわれはグアムに到着した。夜の闇のため、そこが何処だかほとんどわからなかった。土曜日［一二月一日］の午前三時三〇分出発の最終飛行まで、まずい食事と長時間のシャワーで時間をつぶした。土曜日というのは、日付変更線を越えたために一日進んだからだ。

われわれはまた、たいへん気さくな乗務員といっしょになった。率いていたのはアーノットArnottという名の若い准尉だった。かれがプリンシピア大学Principia(1)に通っていた頃、マッカタの娘たちもいっしょだったということだ。マッカタの家族とフライシャーFleisherの家族(2)はとても親しくしていた。それから交通整備員は、オクラホマ大学でトム［トマス］・ブレイクモアTom［Thomas L.］Blakemore(3)と知り合いだったという。機首から本州の海岸が見えてき、飛行機は海岸を横切った。アーノットは厚木に直行せずに横須賀にまわった。そこには横浜さらには東京の方まで、何百隻ものアメリカ船とおぼしき船が浮かんでおり、目印を見極めるのはたやすかった。われわれは皇居の上空をまっすぐに突っ切った。あらゆる方向にわたって惨状はこの上なかったが、ともかくも諸報告で言われていたような全滅という状態ではなかった。

厚木の滑走路は前夜の雨でぬかるんでいて、概して気のめいるような場所だった。東京への乗り継ぎを待つ間、腰を下ろす場所もなかったの

日本出版協会創立３周年記念大会で講演をおこなうブラウン（1948年11月９日、明治大学にて）

で二時間以上も立ったままでいた。ここで初めて日本人を見かけた。空港の建物を造っている大工たち、バスの運転手たち、掃除婦たち、そして英語の教師だったという通訳。誰ひとりとして、不機嫌さや、敵の支配下にあることを自覚しているという態度を見せる者はいなかった。通訳は無駄なく実践的に英語の練習をしながら、寛大な気持ちをもって、すべての日本人が悪いわけではないことをわかってほしいと願い、よく働いていた。

いよいよ輸送手段が決まり、われわれを乗せて横浜・東京方面に向け、でこぼこ道を走っていったのは軍用トラックだった。横浜の郊外までは、すべてが荒廃した状態であるほかは、戦争の傷跡はほとんどなかった。しかし横浜に入ると、風景の中に、がれきや、壊れた建物、さびたブリキの簡易避難所、焼き尽くされた車や市街電車が見え、人びともみすぼらしくて生気がなく、痛々しかった。交通量はかなりあったが、その大半はアメリカ軍のものだった。われわれが接収したということは明白であった。英語の道路標識はいたるところにあった。横浜の建物の多くには軍の表示板がかかっていた。東京への高速道路は、かつては日本で一番よい道路だったが、穴だらけだった。店舗と住宅が立ち並ぶ比較的大きな通りは、破壊されずそっくりそのまま残っていたが、荒れ果てていた。東京に入ると見慣れた建物が増えてきた。芝公園内の寺。芝公園で、一九三一年にハリー・ビンガムHarry Binghamと一軒家を共用していた。それから、帝国ホテル。

われわれはＧＨＱの隣りにある皇居の堀に面した米軍空輸司令部（ＡＴＣ）[4]の事務所で荷を下ろした。誰もつぎに何をするべきかよくわかっていなかった。それにＧＨＱの案内所は何の役にも立たなかった。ラジオ東京に何度も電話をしてみた。そこには民間情報教育局（ＣＩＥ）が設置されているのだが、われわれの管理者であるジョー・ブラウンJoe Brown[5]は外出中で、ほかのわれわれが知っている誰もが同様であることがわかった。ダイク准将General Dyke[6]へかけた電話は、出もしなかった。われわれは荷物をＡＴＣ事務局の床に残して、日比谷公園と帝国ホテルを通って、ラジオ東京に歩いていった。もっと直接的な行動をとろうと思ったからである。そして遂にフリューFrewという大尉に宿割りの問題を質した。六時三〇分までには、われわれはＧＨＱの文民人事部門に登録をおえて、六区画ほど離れた別の事務所で宿割りあての許可をえ、ずうずうしくも第一ホテルでわれわれに最高の部屋を与えるよう交渉した。

マイク［マイケル］・バーガーMike Berger［Michel Bergher］[7]が映画に関する悩みを打ち明けたいとロビーで会いたがっているので、このくらいでやめにしておく。部屋、ホテル、仕事その他諸々の詳細は次回の手紙にまわそう。現在の心境は幾分混乱しているが、絶望はまだやってきていない。可能性は無限にある。それを実現できるかどうかは不確実であるが。生活の状態はひとたび物珍しさが去ってしまえば、やっかいなものになると思われる。そして振り返ってみると、予想したとおり一八五番地［ニューヨークのボブの自宅］が一層ひじょうによく思える。

さようなら。

一九四五年一二月三日、月曜日

（注）

（1）イリノイ州にあるPrincipia Collegeのことか。

（2）『ジャパン・アドヴァタイザー』社主のベンジャミン・フライシャー一家。

（3）民政局（ＧＳ）スタッフ。一九四一年、東京帝国大学に留学。戦時中は戦略事務局（ＯＳＳ）に所属。占領終了後も日本にとどまり、弁護士事務所を開業。ブラウンの古くからの友人として遺産管財人となる。一九九四年死亡、七八歳。

（4）大正生命ビル内に置かれた。

（5）ＣＩＥ管理担当Administration スタッフ（*GHQ Directory, 10 March 1946*）。

（6）ＣＩＥ初代局長。

（7）一九四五年一一月はじめまで、ＣＩＥ情報課の輸入映画担当責任者。その後、ハリウッド映画の日本における配給機構であるセントラル映画社の運営をまかされた。（平野共余子『天皇と接吻　アメリカ占領下の日本映画検閲』草思社、一九九八年、および谷川建司「資料解説：ＧＨＱ民間諜報局／ＰＰＢ映画・演劇班日報」『メディア史研究』第一〇号）。

（中武香奈美）

新刊紹介

『図説　アーネスト・サトウ　幕末維新のイギリス外交官』
当館編

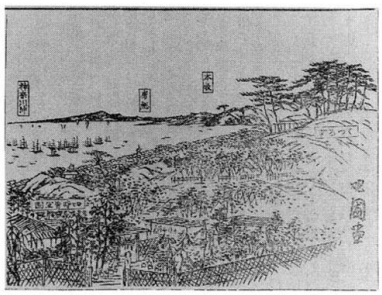
イギリスの外交官サトウが見た幕末維新の日本と、その生涯をヴィジュアルに再現しました。

萩原延壽氏（「刊行に寄せて」から）――サトウの魅力は何んであろうか。それは、「人生の健脚家」とでも呼ぶべき、その多彩な活動ぶりにあるだろう。（中略）この丁寧に編まれた本が、サトウ理解のための最良の入門書のひとつになることは、まちがいない。

（有隣堂発行、Ａ４変型・一二四頁、定価：本体三、五〇〇円＋税）

閲覧室から

新聞万華鏡⑧
明治初年の新聞縦覧所



諸新聞縦覧茶亭屈螻蟻（『仮名読新聞』明治９年７月８日より）

横浜で始まったといわれる新聞縦覧所（内外の新聞を各種そろえて閲覧に供する場所）ですが、その後日本各地に設置されています。今回は各地の縦覧所の様子を見てみましょう。

明治五（一八七二）年一一月発行の『愛知新聞』三二号には、東京浅草寺奥山の新聞茶屋の記事があります。テーブル二脚に椅子一〇脚を並べ、東京、横浜をはじめ諸府県の新聞を備えており、新聞一冊の見料は二厘から二厘半、お茶は五厘でした。また、東京、日本橋通の大観堂という書店では、見料が一時間一銭だったとあります。

明治六年の『横浜毎日新聞』には、淡路国（現在兵庫県）津名郡、遠江国（現在静岡県）中泉村、三重県庄野駅、東京浅草などの縦覧所の記事が載っており、同紙が各地で読まれていたことがわかります。四月一八日に開場した東京浅草並木町の日新堂支局文象舎では、四月三〇日掲載の広告によると、開場時間は午前七時より午後五時まで、一枚一二銭五厘の月券を月初めに購入することで一月に何度も利用ができました。臨時に一時間から一日利用したい場合は、見料三銭となっています。

一二月二七日の神田の一住民からの投書は、小川町の文明堂という新聞縦覧所に『日新真事誌』と『横浜毎日新聞』を見に行ったのに置いていなかったため、日本を代表する両紙を置かないで縦覧所というのは理解できないし、新聞の種類を増やさないと来訪する人がいなくなるというものでした。

それでは、具体的にはどのような新聞を置いていたのでしょうか。横浜の例を見てみましょう。明治九年七月一六日、仮名垣魯文が諸新聞縦覧茶亭の屈螻蟻を開いています。魯文は幕末から明治期に活躍した戯作者で、明治七年に『横浜毎日新聞』の記者となり、明治八年に横浜毎日新聞会社が創刊した『仮名読新聞』の編集をし、後に東京に移って独立します。時流に敏感な魯文は、妻ためと茶店を開き、一服一銭でお茶を出し、新聞を閲覧させました。場所は、植木屋川本友吉が開いた野毛の四時皆宜園という花屋敷の地続きで、横浜市中を一望できる景勝地でした。七月一四日の『仮名読新聞』によれば、そこで閲覧できた新聞や雑誌は、当初は『東京日日新聞』、『郵便報知新聞』、『朝野新聞』、『東京新誌』、『兵事新聞』、『農業雑誌』、『明教新誌』、『横浜毎日新聞』、『読売新聞』、『絵入新聞』、『浪花新聞』、『神戸新聞』、『静岡新聞』、『信飛新聞』、『小学雑誌』、『仮名読新聞』などで、この他追々取り集めると書かれています。横浜はもちろん、東京、神戸、大阪、静岡、長野など各地で発行されたものを扱っていました。

屈螻蟻は一一月二〇日からは、「野毛坂下花やしき内、屈螻蟻縦覧所」として『仮名読新聞』販売所にも名を連ねています。さらに、写真家二見朝隈が一二月二〇日に屈螻蟻を撮影した写真を、横浜十景の一つとして横浜毎日新聞会社から販売するという広告が載っています。屈螻蟻は、『仮名読新聞』が東京に移ってからもしばらくは営業していたようですが、詳しいことはわかりません。

（上田由美）

資料館だより

▼展示

(1)「橘樹郡役所ものがたり－都市近郊農村の半世紀－」 1/30(水)～4/21(日)

(2)「100年前の旅行アルバム－外国人が撮ったニッポン－」（仮称） 4/24(水)～7/28(日)

今から100年余り前、小型カメラの時代が到来し、外国人旅行者の旅行アルバムにも、かれらのカメラがとらえた日本の姿がとどめられました。セピア色の写真のなかから、日光・箱根・京都・瀬戸内海などの情景と人びとの表情を紹介します。

▼寄贈資料

(1) 山手からの横浜市街全景写真ほか 2点 （横須賀市追浜町　井上喜兵衛氏）

(2) 杉山金三郎肖像写真（明治25年、写真師真野せい）ほか 3点 （磯子区磯子　鈴木淑子氏）

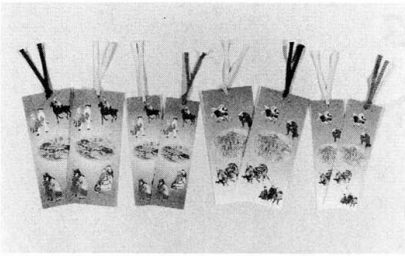
(3) 菓子製造営業免許鑑札（明治24年11月12日　神奈川県、高橋三之助宛）ほか 2点 （瀬谷区本郷　高橋誠氏）

(4) 横浜関係絵葉書 2点 （中区山手町　鈴木晃氏）

▼当館のイラスト・シール付き「ワインサーモ」が好評発売中

ボトルに装着させるだけで、ワインの飲み頃温度がわかる便利な一品です。各種ワインの銘柄が印刷されているので、それに合わせた温度調節ができます。ワイン以外の飲み物にも使用できます。

当館・受付で販売しています。１個800円（本体価格）



▲東海道宿駅制度400年記念－開港場横浜と東海道しおり

同展で紹介された絵柄を使ったしおりを作成しました。１枚80円（本体価格）、ビニール袋入り。

当館・受付でお買いもとめ下さい。

▼共催講座「異国の光のもとで　変わる村のすがた」が盛会に開催

昨年10月13日から11月10日までの毎週土曜日に開催された、久良岐の会との共催講座「異国の光のもとで　変わる村のすがた」には、多数の人に参加していただき、ありがとうございました。

４回目の「根岸村散歩」では、あいにくの雨でしたが、受講者の皆さんは、講師の説明に熱心に耳を傾けていました。

▲共催講座４回目の「根岸村散歩」（久良岐の会提供）

休館日等のお知らせ

月曜日（２月11日は開館）、２月12日(火)は休館させていただきます。

なお、閲覧室は、上記のほか１月31日(金)、２月26日(火)～３月１日(金)も資料整理のため休室させていただきます。